スキーと山

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年六月三十日印刷納本
大正十三年七月一日發行（毎月一回一日發行）

第三十九號

札幌 山とスキーの會 發行

第三十九號目次

記事

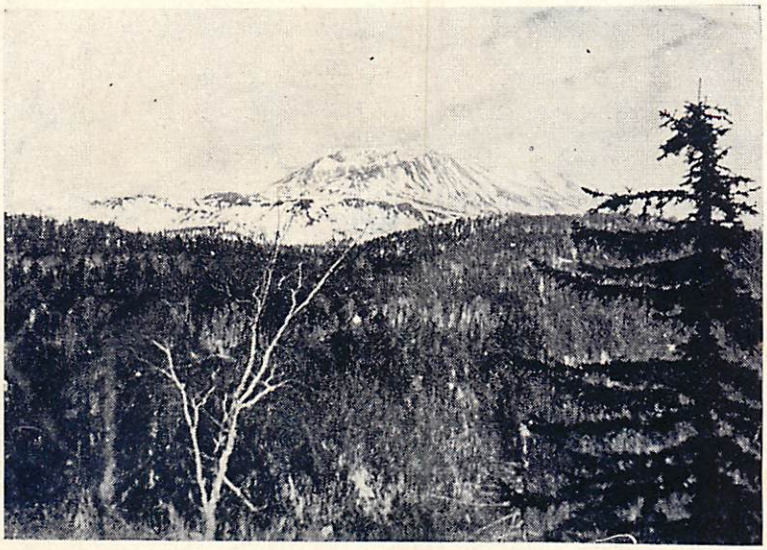
山に寄する hymne　大島亮吉　（一）
山への想片（承前）　藤江永次　（二）
五月の奥山盆地（一）　大島亮吉譯　（一一）
ベルグシュタイガーの日記より　加納一郎　（一六）
山想斷章　額田敏　（二〇）
船形山より泉岳へ　君一生　（二三）
春の中山ゴシツク　（二八）

山岳界消息

圖版

五月の旭岳
雪上の野營

大正十三年七月發行



五月の旭岳

山に寄する hymne

おゝ、山よ！　時と云ふ永遠の工匠に依つて刻み、造られた、おまへのその岩の頂の厳めしさよ、輪廓の優美さよ！　おまへは力ある塊だ。そしてまたデリカなる線の所有者だ。その韻律の無限な壯大さを以つて、おまへは未だ何者も企てなかつた、最も豪華な寺院をば建設した……沈默のサンフォニイを奏ずる、生と死の殿堂よ……

太陽の榮光は、おまへの空に聳ゆる花崗岩の尖塔をば美しく彩り、朝暾の輝やかな火光と落日の燃ゆる緋色がおまへの清淨な雪を崇め高める。

そして、月が谷底に長々と横たはるおまへの氷河を銀色にほの光らす時、水の流れは―おまへの聲は、靜かに歌ふ。地上のすべての生あるものをして、彼等の種子をば芽ぐませるその第一の要素を、絶えず平原へと運びつゝ、おまへは常に歌ふ。

おゝ、山よ！　無限を朔けりゆく世紀の翼は、おまへの硬い額をばかすめる。けれども、おまへは、おまへのその足元に、はかない人間の生命の浪が絶えず寄せてはくだけ、くだけてはまた寄せして、終にはそれが全く地土から滅び消えてしまうその時も、尙依然として、空高く、尊大にそこに動かず座つてゐるだろう

おゝ、山よ！　私は願ふ。人間の最後の生命が消えんとするその時、たゞ一度、おまへの憐心ある眼差がそれに對して與へられんことを。

Charles Gos

Près des Névés et des Glaciers-Impressions

山への想片（承前）

大嶋亮吉

先にも引用したノーマン・コーリィは、マンマリィとは同じ時代の人ではありましたが、前述のやうにある點では少しマンマリィとは考へを異にしてゐるやうに思へます。マンマリィは徹頭徹尾ピークハンターでありました。けれどコーリィのその嘗ては自分等が幾つともなく最初に登攀して、今はもう登り古されてしまつた一九〇二年當時のアルプスに就て、彼のそれに對するひとつの見方をこゝにその一例として觀てみやうと思ひます。即ち彼は同じく前掲のその著「ヒマラヤ及び其他の山脈に於ける登山」のなかの「アルプス」の章で次のやうな語氣を以て言つてをります。

「ある人は現今のアルプスに就て云ふに、もう今ではアルプスも俗化し、人氣が多くなつて、嘗て吾々がよく訪れた親しい幾多の場所も、もう以前のやうではない。たゞ過ぎ去つた以前のアルプスに對する懷しい回想のみが、今やこの墮落した山々と吾々とを結ぶのみだ、と云つた。俗化した山々、人いきれの臭ひ、文明の波浪がユングフラウの山頂に打ち寄せてゐる、ああ、なんと云ふ悲觀すべき光景が私等に想像されることだらう！　而し、よしこの話の事實を究めて、その眞實をみた時、私は決して悲觀はしなかつた。古き登山者諸君、

再びアルプスを訪れてみよ。そこには依然として山々は存在する、而も事實全くの所は決して吾々が五十年前に訪れ見たときと殆んど少しも變らずに。私は矢張り今も尙、その谷の流れに、氷河に或ひは雪の峯に以前と同じ美しさをみとめる。相變らず日は峯々を輝かす、朝と夕べはいろ〳〵と山を彩る。而し勿論私はアルプスかその雪線以下に於ては特に五十年以前とは事態を非常に異にしてゐることは認めもし、また私自身の心指にもその最初に訪れた時とは多大の變化があることも充分に知つてゐる。アルプスは既に私には新しいものではない。その當時谷々の質素な山村も今では開けて俗化した。普通の旅行者もルサーンの遊覽地から高い山頂までも容易に便利に行ける。夏にはある登山の中心地の村などは各國の人が家族を連れ、新聞をたづさえて集まり、大きな、立派なホテルは大繁昌である。例へばツエルマットに例をとれば、そこには數多くのホテルのほかに、第一流のビヤホールがあり、ゴルフ場があり、自動車が走つて、獨逸人も英國人も佛國人も皆各々特有の遊戯や其他の時をすごす方法をしてたのしさうに暮してゐる。實際この時期に於ては、ツエルマットは決して以前のやうな山村としての景觀を表はさない。そこには南佛蘭西の地中海岸にある海水浴場にみると同じ樣な喧騒がある。ホテルの管絃樂は巴里の最近の出し物を奏してゐるし、庭園には上品な人々がお茶の時間を待ち焦れてゐる。そして暑さもめげずテニスコートが盛んに賑つてゐる。これ等の人々は決してモンテ・ローザが氷と雪で蔽はれてゐるやうが、またその泥土の堆積であらうが、或ひはマッターホルンやダン・ブランシュに氷河があらうがなからうが、その樣なことには少しも煩はされはしない。半世紀も以前に、私等が、その時まで誰れにも訪れられなかつたある谷の水上に聳えてゐる山頂を登つて、その麓の谷の村へと降りて來た時、私等は素朴な村人や山小屋の牧人などにいかにも珍らしさうにとりかこまれて、谷の上高く聳えるかの遠い雪の頂を指しては、いかにして、昨日、私達の親しい友であるこの地方の羚羊狩りの獵師とが、その頂によぢ登つたかを語りきかせてやる樣な事實は、もう今では確に出來なくなつてしまつた、永久にそれは出來ないことだ。この點ではアルプスは女王(クイン)のアンと同樣に死んでしまつてゐる。谷々は文明の波浪に押し寄せ蔽はれてしまつてゐる。充分用意を整えた登山者はアルプスの主なる中心地で各々相互に威張つてゐる。彼等は巨きな岩壁や廣大な高き雪原に、日没の彩りや雲霧をさえぎつて、各々自己の個性を刻みつけ樣として努力してゐる。而し幸ひに山や雪原に對して彼等のそんなことをするこは無効だ。過ぎ去つた時と同じ樣、依然として山に對しては彼等は一つの小さな汚點に過ぎない。峯は依然として高く、雪は依然として厚い

而もそのうえ、日の出、日没の光榮は、依然として氷や雪や黒い岩に對して同じだ。人いきれの臭ひも文明のうるさい波音も、この高みへまでは達しない。アルプスは廣い。たとへ私にはもう再びアルプスの第一流の峯を最初に登ると云ふたのしい機會は得られなくとも、私は而も尙、そのたのしい、きまゝな、そして何等の名譽も功名もない山々をさまよひ歩くやうな生活をするために、氷や雪の近くに、或ひは樅の森のなかに行つて、そこで、日を浴び焚火の臭ひをかぎ、終日草や花の上に靜かに寢そべり乍ら、風の聲を聽き、蒼空を仰ぎ、靜まり聳へたつ巨大な峯々の姿を眺めつゝ、時を過ごすべく、度々そこへ歸りゆこうと思つてゐるのである。そしてまた一方に於て、私は、今日のある人々がなすやうに、アルプスのある谷のホテルに一ケ月も泊つて、その地方のまた自分の登り殘した峯々をすつかり登り終へるがために—而もそれは、もう自分はアルプスの峯々はすつかり登つてしまつた、だから自分はもう再びアルプスへは訪れないでもいゝと云ふ樣なことを言ひ度いがために、氣分のすぐれない時でも强いて朝暗くより起きて、骨を刺す樣な寒さのなかにホテルを出掛けてゆくやうな方法で山を登る位ひならば、寧ろわが英國の西海岸のある寂しい海邊に行つてたとへそれが愚かなる時の空費であると非難されやうとも、幾日も〳〵私はそこの物懶い、單調な、そしてゆるやかな波のつくることなきうねりの音を聽き乍ら、砂の上に長く寢そべりつゝ、その水平線の變ることなき海の色を見守つて時を過ごす方が、餘程自分にはよいと思はれるのである。而しアルプスに於て、モンブランの頂に料理店が開かれ、大概の峯の頂へは登山電車が通じ、マツターホルンには毎晩電氣仕掛のイルミネーションがつく樣になるまでには、まだ私等は何度でもそこへ行くべき價値を見出すことは出來ると思ふ。またそのやうな時の來るまでには、雪や氷に蔽はれた山々をさまよひ歩くことの好きな々人に對しては充分なる場所はあることであらう。苔むす岩を登れば、尙そこには私等にとつて遙かの眼の下に長くつゞく氷河や暗綠の森に蔽はれた谷々が、日に輝いてゐるのを望むことの出來るやうな、一人氣なき、靜かな休息所がある。頭上高くに蔽ひかゝる雪庇は永久に碎け落ち樣として、その不安定な平衡で尙も懸つてゐる。嵐は山上に依然として荒れ狂ひ、電光は閃き、雷鳴は轟き、雪は吹き舞ひ、そして鋭く骨を嚙む寒風は屢々依然として、不用意な登山者をまた低き地へと遂ひ返すことだらろう。そしてその後には再び日は麗らかに輝いて雲は消え失せ、この古き山々は依然として尙も崇高く聳えつゝ、朝に夕に今も尙「永遠の孤獨なる手すさび」である、かの類ひなき色彩を以て、自らを彩つて私等の眼前に現はることであらう。山々が私等に語るその言葉をまなび聽くことを

得たものにとつては、常に永久に、山々がいろ〳〵の聲をして私等を呼び寄せてゐるのをみとめることが出來る。アルプスは俗化したと云ふ。而し私は決してそれに依つて悲しみはしないと思ふ。私自身に對しては、依然としてアルプスは私を引き寄せるに足るまだ多くのものを持つてゐる。私はいつも夏の終りになると燕が南へと歸りゆくと丁度同じ樣に度々そこへ歸りゆこうと思つてゐる。そして若しも、不幸なある出來事のために私自身が永久にその雪の世界より歸ることが出來なくなつた時に於ては、私の魂は、若しもそれが尙も歩くことの出來るものであるのならば、私はあのロンドン墓地のわが家の墓石の下に靜かにして眠るかはりに、尙もまたその汚れなき、高き清淨な峯々、雪の原を飽までさまよひ歩こうと思つてゐるのである。(J. Norman Collie, The alps; Climbing in Hima laya and other Mauntainrang es.1902)

コーリィのこのアルプスに對する言葉をよんでみますと、そこには確かにもうその以前に彼がその友マンマリィやヘテイングや或ひはスリングスビィのやうな人たちと共にアルプスの各地に、新らしい、困難な登路を開いては山々を登り歩いてゐた時分とは非常にちがつた考へで、尙も山へ行こうとしてゐることが窺はれやうと思ひます。勿論言葉そのものゝ上では明らかにみることは出來ないとしても、その登山の態度は確かに同想的であり、依つて同時に靜觀的であるやうに思へます。コーリィは實に古い近代登者者の一人です、そのやうな人が晩年に到つて回想的な態度で再びアルプスへ行くのは極めて當然らしく思ひますが、私は單にそれだけの氣持のみではなくそのうちは尙もつとある深い思索的な態度も多分にはないかと思ふのです。而しこのコーリィにはまだその點では明らかに靜觀的な態度を示すものでないとするならば一層明確なその態度を窺ひ得るものは、それより以後の、即ち現代のある登山家等の書いたものであらうと思ひます。それ等の人々が即ち現代の一部の傾向を確保する人氣であります。私の知るごく狹い範圍で、現在この靜觀的な態度で登山してゐる人々のその心境の幾分を窺ふに足るものとしては、その著書のうちに現はれたる所に依つてのみ觀れば、例へば獨逸ではヘンリイ・ヘークの「道と道連れ」(Henry Hoek, Weg und Weggenossen. 1909)やオスカー・エリツヒ・マイエルの「行爲と夢想」(Oskar Erich Mayer, Tatuud Traum. 1920)など、瑞西ではハンス・モルゲンターレルの「彼等の山々」(Hans Morgenthaler, Ihr Berge, 1917)や、ヴィルシイル・ロッセルの「山上のそゝ高く」(Virgile ,Rossel, Lä-hout, sur la Montagne. 1922)や、或ひはシャルル・ロオの「万年雪と氷河のほとり」(Charles Gos, Près des Névé et des Glaciers,

1912) など、また英國ではジョッフエリイ・ウィスロープ・ヤングの山の詩集「風と丘」(Geoffery Winthrop Young, Wind and Hill. 1913) などの著作のうちに多くその樣な態度が見出されます。

然し乍らこの態度ば決して往昔、登山史の曙光時代に於ける所謂初期登山者が、自らを濟度するためや、或ひは靜思を求め、思索の時を得んとして山へ行つたその心意の態度とはその外部的に於てはともかく內部的に於ては全くの徑庭が存するのであります。例へば佛蘭西革命の頃に於て、文人として知られたシャルルド・カルボンニエ (Charlesdei Carbonnier) などは、當時山登りを好み、またピレネーの山中に住んで、初期に於けるピレネーの開拓者の一人でありました。彼はよくそのピレネーの山上高くの岩の上に座して、谷より湧き上る霧を靜かにみつめ、遙かの低き西佛蘭西の平原を見下し、或ひは頭上高くに靜まり聳える峯の頂を眺めては、ルッソーを讀み、ゲスネルを想ひ、はては已れの母國、かの佛蘭西の平野のほかに於ける人と人との間の不平等を想ふて、終にはそのために叫んで、山上の孤獨靜寂な讀者と思索の日常をすて革命の渦中へと下りゆいたと言ふ樣なことが、有名な登山史家グリッブル (Francis Griffle, Th eearly mountaineers, 1909) に依つて語られてをります。この樣な態度を少つと考へますと、今日の靜觀的な態度は、これらへの復歸ではないかと思はれますが、然しそれは全く根本的にちがつてゐるやうです。初期登山者にもまた一種の深い靜觀的なものがあつたことはあつたでせうが、それは今日のそれと外面的はともかく內面的に於ては非常な相異、否、全然異なつてゐるものと思ひます。このやうなことは極めてみやすきことで、私のこゝにのべるの必要もないのではありますが、序でのため一言申しそえる次第であります。

さて、それならばその靜觀的な態度とはどんなものか、と云つてもそれを一言に云ふことは甚だ難く、たゞ概括的にその幾分を傳へ申すほかはないと思ひます。即ち强いて申しますれば、ピークハンターの心は多くの場合、たゞある峯を登るために、その未知の不安、困難、勞苦に堪えて、その峯の頂に達するために燃えてゐました。主としてそのことが登山の大部分でありました。そこにのみ多く彼等の喜悅と幸福とは見出されたのでした。峯を登り、谷に下りて來ての想ひもまた多くは自らが苦しみてその峯を最初に登つたと云ふことの勝利に對する歡喜とその幸福の追想であり、想ひ出でありました。それはたしかにこのうえなき自らに對しての悅びであり幸福感でありませう。それはたしかに純眞な精神の極度の燃燒よりのみ得る喜悅感でありませう。けれど今日のこれらの登山者は決してこれらの喜悅をも幸福をも感じ得ること

の出來ないことは、すでに前に掲げたギドー・レーの言葉に依つてもよく私等の了解し能ふ所であります。それに對して今日の靜觀的な登山のやり方をして山を味つてゐる人は、こう云つてゐます。即ち、私のよく引用しました言葉ではありますが、かのモルゲンターレルはその著「彼等の山々」の最初の頁で、「山に登るものは、みな自らの力をば誇稱せんとするものであらうか？否、そうぢあない、彼等のうちの最も力あるものこそ、却つて靜かなる幸福をのみ自らに希ふものなのだ！」とこう言つてをります。この短かきひと言は、而しよく現在に於けるある一部の登山家の山へ對してこの心境を言ひ表してゐるものと私は思ひます。この言葉は確かにピークハンターに對して與へられたものであらうと思ひます。今日の登山者は登山の技術に於ても知識に於てもずつとその最初の征服者、即ち近代登山者よりも上にありますから、その最初の登山者の困難した處も容易に行くことが出來、從つて山をのぼるのに餘裕があります。依つて山と鬪ふと云ふ氣持よりも山と親しむと云ふ氣持の方がまさつて味はれるのであらうと思ひます。その故勢ひ思想的に深みを求めて行つて、その態度は終ひに靜觀的と云ふ概括的な包容的な一語を以て言ひ表してもいゝと思はれるやうなひとつの山の登り方となつて來たのであらうと思ひます。尙このほかにいろ〳〵と言ひ得べき途はありませうが、要するに抽象的に短く言ひ表はすにはまづこのくらひにしが私には現在言ひ表し得ないのであります。而し、嘗ての機會に發表したことのあるヴァルメー・シュミットクンツの「心の山」(Walter Schmidkunz, Der Berg des Herzens, 1922) よりの抄譯文の「吾等山に登る者が、山にゆきて其處にあるすべてのものに對して、此等をたゞ內体的な、感覺的な眼を以てのみ眺めつゝある間は、吾等は未だ山々の吾等に提供する凡ゆるものを見てゐるのではないのである。まこと其等のものに加へて、更に吾等が有つその理智的な視覺によりて山々を望む時、そこに始めて吾等にまで、はつきりと山々はその缺くる所なきまことの姿もて現れ出づ」とか、或ひはモルゲンターレルのあるものなどに依つても、その幾何かゞ窺はれやうかと思ひます。またかのマンマリーが一八九五年に「眞の登山者は常に新しき登攀を求めねばならぬ」と言つたのに對して、同じ英國の登山家のアーノルド・ランが一九二〇年に於て「眞の登山者は、そのあらゆる季節に於ける山々の狀態を研究し、知らんと欲するものでなければならぬ」と言つたことを想ひ合せると、ある明確な兩者の相違の對立をみることが出來やうと思ひます。

扨て以上の甚だ簡單にして、足らざる處多い記述ではありますが、それに依りまして、登山者の山を登るに就ての考へと云ふもの、依つてまたその山を登る外面的な態度と云ふものが、必然的に歷史的な推移を以て、ピークハンティングか

ら、靜觀的な態度へと移つて來たことを申しました。このことは、アルプスに於てのことでありました。またある一部の登山者の有つものであります。こう云ふ成行きが、果して自然であり、正し登山者のとるべき態度であるかどうかに就ては、勿論私のごときが云々する所ではありませんが、敢へて自らを顧ずこのことに就て私のはしたなる考へを述べることゝ致します。

マンマリイが持つてゐた、あの樣な心は正しく、まことのピークハンターの心でありませう。その心を享けついたればこそ、また今日の靜觀的な登山法も生じたのだと私は思ひます。今日の登山者は矢張りピークハンターの心をもつてをりますが、彼等はもう種々なる條件のために外面的にピークハンターとはなり得ないので、終に今度は內面的に、各々の登山者が心のうちに聳えてゐる未知未踏の山を、新らたに登りはじめたのであります。シュミットクンツの言葉を藉りて申せば、內体的な視野に映ずる山々に登りつくしたものは、更に尙もまたその各々の心野のうちに聳える、是迄知られざりしまた登ることもなされなかつた山々、即ち「心の山々」を登らうとしなければならなくなつたのであります。勿論事情の許す限りに於て、多くの登山者は、否、まことの登山者は飽まで新しき山頂—、純眞なピークハンターの心を以て、かのマンマリイの抱いてゐたやうな精神を以て、求め登ることではありませう。而し、これはすべての、まことの登山者にまで與へらるゝことはあり得ないのであります。それ故それ等の登山者は今度は內部的に深味を求めることにやむなく轉向して行つたのでせう。このなりゆきは自然であり、また正しいものと私には思はれるのであります。これと同時に是迄の外面的に觀た登山法より出でゝ、新しい形式の登山法が現はれ、それがまた分化されて進んでゆくことも、また正しいひとつの登山の發達と思はれるのであります。

それならば、私等山に登るものはいかにして山を登るべきであるかと申しますに、それは飽まで山と鬪ふ氣持ですゝんでゆくピークハンターの心と、靜かに內面的に深味を求める、即ち靜觀的な態度とを深く交へて、たゞ一途山を登つてゆけばよいのであると私は敎へらるゝやうに思ひます。そしてそれ以上に就てはこれまでの登山者の誰れも私には何も言つては呉れないのです。

嘗て故板倉宣君が我國の登山界に對して「登山法についての希望」なる一文で言はれたことは、要するに我國に於ては山々がすつかり登られてしまつてからは、寧ろそれ以前から多分にこの靜觀的な態度で登山をしてゆくことは、それが東

洋的な特徴でもあるためか、可成り深く進んでゐるのに、外面的な登山法の進歩が足らない、まだその方面では開くべき餘地がたくさんあると言ふことをポイントとして言つたのでありました。實際に我國に於てはこの外面的に於てのみならず、内面的な方面に於てさへも充分に前途の展開は得られるものではないかと思ひます。

漸く私はこゝまで來まして、そのかみの古き登山者の山を登ることに對してとつた態度や見方が、次第に登山そのものが時の經過と共に必然的に發達して來たことゝ伴つて變遷して來たことを、主としてその無形的な、精神的な、或ひは内面的な方面から極めて一小部分に就て觀て來ました。若しも登山思想と言ふ言葉が使はれますのならば、それはまた「登山思想の時代的變遷」とか、或ひは「登山思想の歴史的推移」とかに對する考察の一局面を示すものと思ひます。

そのかみよりの山に登つた幾多の人々が、その山に寄せたいろ〳〵な深い想ひについては、實に計り知れぬものがありませう。そしてそれらのうちのある人々が、時たま、偶と言葉としたものゝうちに漸くその幾何を窺ひ知ることが出來るのであります。

「登山者とは唯山を登ることそれのみに悦びを感ずるものである」と言ふコーリィの言葉はこの言ひ表し難い—或ひはふを好まぬ登山者の山へのいろ〳〵なる想ひを一つに單めて言ひきつた、味ひ深ひ言葉であると共に、また、現今英國一言流の登山家で、高架索通として知られ、現に一九二一年のエヴエレスト登山隊のリーダーに推されたハロルド・レーバンは六十歳に近き身ですでにその前年よりヒマラヤの諸高峯に登山を試みてゐた人でありますが、その一九二〇年に著した「登山術」Mountaineering art なる著書の跋詞として次なる言を致してをります。

「私等山に登るものは、何故にこの樣にまで山々を愛するのであろうか。それは山々のその形態の美しさにあるのだろうか。或ひは時には危險を伴ふその登攀の困苦の闘ひに依つて得る純な肉体的な歡喜に因くのであらうか。或ひはまたそれはこの山々の至高の王國への關門を護る氷と岩との墻壁を打ち越えて、そこに安全な途を見出すために、私等の機智を置かしめるその精神的な歡喜に因るのであらうか。

またそれは黎明のその神秘な指先に依つてなされる、雪、岩、空のその色彩と調子との壯麗な交響樂が、私等に訴へるその視覺の特異な快感に因るのであらうか。

それにともまた、それは群巒を壓して聳ゆる高峯の頂に立つて、私等の周圍に新らしく擴がつた、廣い地平線の觀想

の不思議な、刺戟的な精神の向上に依るのであろうか。或ひはまた、それは同じ一條の繩に相互を長い間結ぶその友達たることに依つて、私と友との間を固く結ぶ、同情と信頼と友との人と人とのひとつの連鎖にあるのだろうか。

すべて此等の、尙他にまだ數多くあるいろ〳〵な理由に對して、山は單なる言葉に依つて言ひ表はされるには、餘りに微妙に登山者の心にまで親はしいものなのである。(Haroed Raefurn, Mountaineering Artの跋詞)

それからまた本邦登山界の耆宿、木暮理太郎氏が、田部重治氏の著「日本アルプスと秩父巡禮」の序文に於て

「私達が山へ登るのは、つまり山が好きだから登るのである、登らないでは居られないから登るのである。なぜ山に登るか、好きだから登る。答は簡單である、しかし夫で充分ではあるまいか。登山は志を大にするといふ、さうであろう登山は剛健な氣象を養ふといふ、さうであろう。其他の曰く何、曰く何、皆さうであろう。而し私なごは唯好きだから山に登るといふだけで滿足する者である。

と言はれてゐるのも、ともゞ〳〵に私等未だ若くして、山山が我等に語るいろ〳〵な言葉をよく聽きわけ得ないものにとつては、限りなく味ひ深き辭であります。そしてまた、それら言葉は、これからしてそれらの人々の山に寄せしその深き想ひのはてをはるかにうちながめんとするものゝの心胸のうちに、全く燦たる啓示の光りを與へてくれるものであります何と言つても、私等若きものには前途はあります。大地の上に立つ私等の眼には尙も依然として高き山々は聳えてゐます平原はいま未明です。私等はをぐらき谷の朝にをります。たゞ峯の頂のみが朝の太陽の第一線に光つてをります。そこまではこゝよりは非常に遠く、そして高いでせう。けれども私等の踏みだすひと歩みごとに、次第に私等の身は高まりゆきそして私等の視野は次第に擴がり開けてゆくことでありませう。

五月の奥山盆地（一）

藤江永次

近年我國に於ても登山が冬期に於て度々撰ばれるといふこと否夏期のそれのみにては滿足しきれずあらゆる季節に於て登山が行はれるようになつたのはベルグシュタイガーの當然行くべき途であらう。然し氷と岩に輝ける鎧にその神秘を包みただ訪れるものとては吹雪のみだつた、ピークの、一つ一つと我々の前に眞のその姿を表すようになつたのはまことに喜ばしい次第であります。私はベルグシュタイガーの末席を汚すといつても烏滸がましい位の者でありますが、山へ入り又常に山のことを考へてをる者の一人として私も亦絶へずそのために努力を續けて來ました。そして此の度も冬への努力の第一歩として私達五名の者は約十日間を五月のまだ雪の深い北海道中央山地で送りました、その貧弱な經驗と印象とを私の拙い筆で書きなぐるのですが幸にその内容が幾分でも諸兄の參考にまでなれば私の滿足はこの上もありません。

ヒュッテの設備のない北海道中央山地の冬期登山は甚だ困難であつて根據地としては松山温泉に層雲別温泉があるばかりで、しかも甚だ利な位置にある。最も有効なるは伐木に入る木樵のトドで葺いた粗末な山小屋である。之等を中心として、幾度か冬期登山が行はれ、最高の旭岳、黒岳なども既に極められてゐる。然るに何等の不純物を許さない唯彼等のみの世界に於てオトブケの嵐に、ヌタックの吹雪に、白銀の裝をして、樂しい冬のメロディに耳打傾けてゐる石狩岳は、その神秘の姿さへ、非常な努力なしには見ることを許されない。まして眞冬粉雪の奥山盆地に滑り込んで、多分は厚い氷で覆はれてあるであらう石狩岳の山頂を極めることに於ては虞らくは北海道の冬期登山の最後に行はるべきものかと思はれる。

ゾンメルシーに就て

この度の旅行は勿論コンビネーションの登山だつたのです、私達は一二年前からゾンメルシーを使用しだしましたそして、今度もそれを持つて行つたのです。

或人は日本の山では餘り必要がないと言はれましたが、私の淺い經驗の範圍に於て、そして少くとも北海道の五月の山に於ては有効であるといふより必要であるといふことを知つた。尤も滑走の享樂を得るためには長いのに若くことはないが、その運搬に於て、登行に於て、滑降動作の容易なる點に於て、重量及形狀の小なる點等は、五月の比較的硬雪期に於ては遙に有効である。

單に滑走を樂むために山へ登るシーロイファーと異つて山へ登ること、それ自身のために山へ登る、ベルグシュタイガーが後者を撰ぶのは當然だと思ふ。

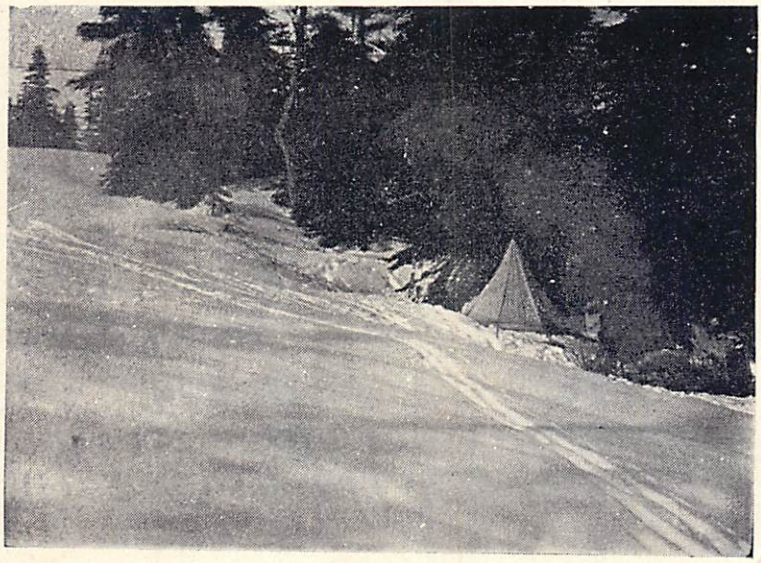
又或人は、五月の硬雪期には、敢て、ゾンメルシーを使用する必要がないと、言はれるかも知れない、然し私の貧しい經驗では、晝間に於ける雪質、即、表層軟雪や、融雪の時分の歩行には、靴を沒し、膝近くまで踏込むのである殊に樅松の上を覆ふた雪を歩む時など股までも沒することは稀でなく、從つて、短距離の歩行にも、時間的に又勞力の上に於て、非常に大きい損失を生ずるのである。

（尤も之は晴天の日を標準にして言つてゐるのであつて、この地方では、五月でも、新雪の降るのは、珍くない。人夫の話しでは、今年の雪の軟いのは寧變調ださうだが、去年の五月四五日間暑寒別岳方面へ入つてゐた時の雪質と大差はなかつたように思はれる）

日本ではゾンメルシーの使用期間は極めて、短く、七、八月の登山には殆んど、使用の餘地がない。然し五月の山に於ては、我々は、シュタイグアイゼンに次ぐ重要なものであると同時に、今後大いに研究すべき價値のあるものであるといふことを痛切に感じさせられた。私も諸兄の指導を待ち今後共に、益々研究して見たいと思ひます。

私達の目下使用してゐる、ゾンルメシーは、長さ四尺五寸位、幅は、ビンドウングの付く部分で二寸六分で諸國式のビンドウングを付けてゐます、厚さはトウワイヤーを通す部分が最も厚くて、八分です。

昨年は普通こちらで用ふるスキーと、同じ幅即ち、二寸二―三分位の所を用ひたのですが今年は幅を廣くして見たのです



雪上の野營

以下紀行の側ら實際に經驗した場合を引用してゾンメルスキーのことも所々書き入れて行きたいと思ひます。

松山附近

月明の夜丁度二十日ばかりの弦月が眞南に輝く頃、私達五人の者は、汽車に搖られてゐた。重いリュックを擔つて松山温泉まで行く明日の八里の行程を思ふと、充分な睡眠が取りたかつたが、流石に暫し興奮の時を免れ得なかつた。

ゆるい五月の日光に射られながら美瑛の村を出たのは八時頃だつた。澄んだ空に切立つて見える、未だ深く雪に包まれてゐるオプタテシケの連山は一つ一つ我々の心を牽すにはおかなかつた。道は單調だつた。雪が消えて間もない兩側の水田や畑にはすでに種蒔に忙しさうな農夫を見た、今時にスキーを荷いて行く男達、そして忙しさうな農夫等それは又皮肉なコントラストではなからうか。

松山温泉附近には、殆んど殘雪を見なかつた、今年の雪の少いことは變調であつて、例年は、松山まで來れば、雪は續いてゐるそうである、松山温泉は丁度、日本アルプスに於ける、上高地、中房、立山温泉と、いつたような位置で、北海道の中央高地への登山口の一つである、松山から旭岳連山を越えた向側の石狩川に沿へる所にも亦層雪別温泉があつて之も亦登山口の一つであつて、層雪別から火口壁を通り旭岳を經て、松山へ出る旅行は夏期の、一日行程には甚だ面白いコースである、松山温泉は昨年までは貧弱なる小屋掛のような所だつたが今は立派な温泉宿兼驛遞となり益々、增加する登山客のために大いに便宜を與へることだらう。

松山温泉は深く切込んだ忠別川の谷底にあつて、兩岸高さは約二〇〇米位かと思はれる、右岸は柱狀節理をなした崖で旭へ行くにもにも僅に羽衣瀧の側か登れ得るに過ぎない。左岸には崖らしいものは見ないが甚だ急傾斜の上りである。ヌタツクヤンペツへ出るには、カウンナイを遡つてトムラウシとカウン岳との中間へ出るか、姿見から旭岳の爆裂火口の下を廻り火口の左側を、旭岳と、熊岳との鞍部に出で白雲岳の右を通つて、平ケ岳に出で忠別岳まで行つてヌタツクヤンペツを下るのであるが、五月の雪解に水の多い澤を上ることは可成危險も多く、夏と異つて、靴を濡すことは苦痛なる故、ウカンナイを遡ることは避けた旭岳を廻ることも日數に制限されてゐるため之も避けた。

そこで、松山温泉の左岸の急傾斜を上り、化雲岳の方へ續く針濶の混合樹林を行くことにした。尤も松山温泉には雪がなくても、この崖さへ登れば雪のあることを豫想してゐたからであつて、到底夏期に於ては、根曲笹や、灌木のためとり

得ざるコースである。

左岸の崖は約二時間を要して登り得た、臺地は豫想に反し雪が續いてゐなかつたため、僅の距離であつたが鍛を抜けるに案外の時間を要した。雪が續くようになりゾンメルシーを付けてからは、我々には實に樂な狀態となつたが森林帶のこと故、倒木多く（倒木の上に覆ふた雪は一見變らないがその兩側は融けて下部は削つたように薄くなつてゐるから知らずに踏む時は、段々深く落ち込むことがある）人夫はそれでなくとも深くぬかる雪に、甚だ困難をし、到底我々と歩調を合せることは出來なかつた。然し段々登るに從ひ、積雪も多くなり。倒木から受くる障害ば免れ得たがこの日の行程は已むなく、ポンカウンナイ上流の針葉樹林で終らねばならなかつた。

一体に北海道の山は、森林帶及それ以下の所には、灌木根曲笹が密生し、それより高所にてははい松多く比較的自由に、屋根に或ひは腹にその路をとり得る内地の山と異つて澤か、道か苅分の外は殆ど通過不可能である。それ故、積雪期でなければ行き得ない所が多い。從つて單に五月の山へ登るといふより、積雪を利用して登らねばならぬ山もある。今度の私達の行程も殘雪の續いてをることは最も大きなエレメントをなしてゐたのである。然るに今日の行程に於ても意外に殘雪の少なかつたのは大打擊だつたが幸に四五年前につけた測量の苅分の跡がかすかに殘つてゐたことは餘程の助けとなつたのであつた。

こうした場所の通過に際しては、ゾンメルシーは、二つ合せてバンドで結へ肩に掛てゐるのであるが、丁度體の影になる得る程度の長さ故ゾンメルシーを持つための困難は感じなかつたが、六尺に餘る、長いスキーを持ち歩むことは到底堪へ得ない處だらう。

高い所の松の葉一つ動かない靜な夜だつた。微にどことなく聞えてゐた雪の下を流れる水の音ももう止んだようである。テントの中には松の葉が部厚く、敷きつめられた。大きな焚火を圍んで熱いココアを啜つてゐる友の間には沈默のうちに心と心との會話が續いてゐた。

ポンカウンよりヌタツクヤンペツへ

朝、雪の硬いうちに森林帶を抜ける最後のポンカウンに沿ふた急傾斜の所を百五〇米ばかり登つた。後は化雲岳の圓頂へ續く一面の雪田である。日は既に餘程高く昇つてゐた。春らしい柔いがしかも明い光線に、旭岳、後旭、の鈍重なのや

纖細な白雲岳の容姿白い荒原に深く切れ込んだ白雲澤が如何にも春らしい景色を浮出してゐる。

果しなく續いてゐる雪田を一直線に進んで行つた、背景といひ虐げられた冬の生活から再び春の生命が甦つたことを象徴するかの如く、生々としたその色彩を擴けてゐるはい松や食ひ込むように重いリュックまでが如何にも「春のスキーライゼ」と言つた氣成に相應しく思はれた。

化雲岳の頂上へは一時頃に着いた、距離の割合には時間が多くかかつてゐる、流石に元氣な高橋（ヌタツク附近の山に就いては最もよく識つてゐる人夫の一人で非常に力强く元氣な男である）もこのぬかる雪には少からず弱らされてゐた。實際スキーを付けてゐる私達と、彼との速さでは百米進むについて三十米餘は遲れるのである、それは化雲岳の頂までの傾斜は緩で電光形登行をする必要のない程度であつたせいもあるかも知れない。

登行について

私はまだ、等しい高さを、電光形登行による登行と、スキーをつけずに、直登行する時との時間的な比較はして見ないが多少の時間相異よりは無益の勞力を防ぐことの方が重大な問題である。

この問題はその時の雪の狀態にもよるが軟い融雪に於ては、スキーを用ひ、硬い雪の時は直登行をとるべきだと思ふ。

硬雪の場合は論ずる餘地もないが、軟い雪の場合に就いて物理學的に言へば、等しい高さに達するに、そこに若し何等の抵抗がなければ眞直に達するのも迂廻するのも要する、エネルギーは等しい。然るに、靴のまま直登行を行ふ時は、この軟雪に、ぬかり乍らも崩れ易い、ステップを作るといふそこに大いな抵抗動作を生るのである。それが又無益な勞力なのであつて、この損失勞力はゾンメルシーを等しい高さに持上げるエネルギーより遙に大きくはなからうか。一般に融雪時に於てはスキーの逆行度は甚だ小さく冬の雪では及びもつかないような傾斜をも融雪時には直登行し得るのである、冬期のスキー登行に於ては、キックターンに可成の時間を損失するがゾンメルスキにては殆ど、普通の一歩と、時間的には異らない、までに速に且安全に行へ得るのである、亦、軟雪期の斜登行に於けるスキーの使用は、一種のステップを作ることになり、底面積が大なれば小部分の受くる抵抗は小なる故、比較的安定な位置を保ち得るのである、この意味に於てもスキーの幅を廣くしたことは可成の影響があつたように思れた。スキーの幅を廣くした第一の理由は、角付をよくするためであつて、角付か完全に出來る時は、このゾンメルスキーを比較的硬雪にまでその範圍を擴げ得るのである。亦之は

急傾斜の斜面を横切るに、有効である。冬期にても往々、トウワイヤー又はビンドヴングの革にて角付を失ひ、失敗することがある。

化雪岳は忠別川の本流とカウンナイとにより狹まれた、尾根の頂で山岳會發行の小泉氏の地圖とはその位置を異にしてゐるように思れた。カウンナイの向ふに、壓へ付けれるように、トムラウンが迫つてゐるそれに續いて高低の多いオプタテシケの連山がその白銀の峯を競ひかすかに十勝岳も見えた。

又一方には思出深い石狩岳が水蒸氣の多い空氣の中にぼんやり浮んでゐる、右の方はニソペッだらう。どこから見ても鋭いそのピークは何人の心をも牽かずには置かないだらう。

「北海道の最後の山は石狩岳だ」思はず叫びたくなるあの氷の頂に、始めて、しがみ付いた時の喜悅を想像する時一しほ脈動の高まるのを感ぜずにはをられない。

化雪からは、忠別の本流に沿ふた崖を約二時間ばかり傳ふて、ヌタツクヤンペッの上流に出た。

ベルグシュタイガーの日記より　II

大嶋亮吉譯

□

五月のPavillon Dolijuss

アルペンにある數多くのヒュッチの位置は、そのどれでも皆非常によい場所にある。然し私はそのうちで、四季を通じて最も私の愛してゐるのはこのパヴィヨン・ドルフスである。そして殊に私はこのヒュッテの五月を愛する。私

は一九一八年の五月の二十日に私の三人の友人と共に其處へ行つた時のことを決して忘れることは出來ない。その時私等は全く日に輝く氷河の暑く、烈しい光輝とその眩ゆい光りの反射とに疲れ果てゝゐた。そしてそれに尙また、その時私等は全る四日間と言ふものを高いシュネーフエルトのなかにさまよひ歩きつゝ、送つて來た後だつたので、雪と岩と氷に對しても全く飽き果てゝゐた。私等は早朝からの長いスキーの行進をつゞけて、いまヒュッテをめざして進んでゐた。そして、そこに！鋭い岩のグラートと輝く雪のみのなかに美しい綠色のオアーゼとなつてゐる若々しい春の草地のうちに、私等はこのパヴィヨン・ドルフスを見つけ出したのであつた。ヒュッテは丁度眞南の斜面に開けてゐるので、春には其處の雪は非常に早く融け消えるのであつた。そしてその後にはすぐ鮮やかな綠金色に若草は萠えて、その上には一面に春をまつさきに咲くゲンティアナとアネモネの花が咲き亂れてゐて、雪解けの水は、チョロ〳〵と悅ばしさうにそのなかを流れてゐる。私等は丁度ヒュッテの前のその軟かい草地の上にねころんで、魅惑的な小さな流れの音を靜かに聽き、最もけだかい自然の畫をながめ、シュレックホルンの氷の塙壁を越えた向ふにフィンステナールホルンの巨大なピラミードを望み乍ら、その平和な愛すべき午後を過ごしたのであつた。

實に私等がその五月のパヴィヨン・ドルフスに過ごした午後のひと時こそ、これまで私のアルペンに過ごし得たさまざまの印象のうちで最も忘れ難く、そして美しいものゝひとつである。

Arnold Lunn.
(Frühlings-und Sommerskifahrten, Jahrbuchdes S. S. V. 1919,1920.)

□

Wandfluhの石室で

七月のすばらしく天氣のよい午後である。私はいま、友のジオセフ・レルジアンと二人でこの Wandfluh の石室の平らな岩の上に、丁度蜥蜴のやうに眩ゆい日光を浴びてねそべり乍ら、その前の日にやつたQuatre Ancesのアレートからダン・ブランシュをトラヴエルセしたその出來事のメモアールのなかに私等の心を浮ばせてゐる。—ほがらかな午前、美しい姿を自ら感ずるの悅び、空間の微醉、光りの眩暈、滑らかな岩壁をたゞ指先のみに依つてよじのぼるその嘆賞、薄い剃刀のやうなアレートの騎乘、外側へ傾いたやうな片岩のトラヴエルセそれにあのアレートの狹い岩の裂目の間に僅かに私の湯拂器を置いて沸したテーの美味さほんとにその時はじめて私等は、惡意ある人間から逃れ遠

ざかつて、この鋭いアレートのあたりにゐるかも知れないあのおとなしい羚羊が感ずるやうな自由な悦びを少し想像することが出來たと思つた。そして昨夜この硬い岩の間に過ごした氷のやうに寒い夜を想ふと、堪えられぬほどに、この下の谷の Schönbühl の登山小屋が建てられてある、あの丘の軟かい草地がなつかしくなつて來る。實際私等はいまこの硬い岩の上より、あの登山小屋の柔かい藁蒲團の上に寢ころび乍ら、たゞパイプの煙の卷く渦をみつめてゐたいと言ふ欲望の方が、明日 Zmutt のアレートからセルヴァンを登る久しく夢に描いてゐた計劃よりも強くなつて來た

山々としつかり取組んで一週間、喜悦と苦難の間に氷と岩と闘ひつゝ私等の身体を勞苦させたいま、私等のより熱望せる願望は達せられてもいゝ筈だ―谷の暖かい寢床と甘い牛乳と新らしい、燒き立てのパン―、床谷の牧場から微かに反響してくる頸鈴の音は、私等の心を招くやうに引き寄せた。

Marce Morel.

"Traversée du Lyskamm"....L' Echo des Alpes, No4 より

□

登山小屋の夕べと夜（カバーン・ブリタニアにて）

この氷と岩のみのソウバージュなべエイサージュ、山々の虚無と無限のたゞなかにあつては、わが、Cabane Britannia は全くノエのあの安全な方舟のやうなものである。天候の激怒と夜の寒さから自分等をかばつてくれるこの登山小屋に對してどれほど自分等は感謝したらいゝだらうか。この小屋が四日間自分等に與へて呉れた、その淡泊な、素朴な歓待は永い間自分等の忘れられないものである。

× × ×

自分等は今日は Allalinhorn に登つていま歸つて來たばかりである。

熱いテーの茶碗を手にし、兩足を毛布のなかに入れ、パイプをくはへ乍ら藁床の上に快よく横になりつゝ、夢みるような眼差をもつて煖爐に辨く焔や煙突のそばに乾してある靴やなほまた卓子の全面に無秩序に投げ出されてある食料の堆積をながめる時のなんとたのしいことだらう。小屋の硝子窓よりは、丁度額縁のやうに常に不動の山々の姿が望まれる。その下部の方にある蒼く凍つた氷河はすでに薄暮の暗い陰影のうちに入んこんでゐて、たゞ上部の波狀のアレートのみ輝かじく光りに向つてゐる。その海老茶色した氷の上には、澄明なエメロードの空がつゞいて、軈て間もなく第一の星はそこに煌き出すことであらう。

自分のパイプ、友の紙巻煙草の煙、煖爐の洩れる煙は忽ち室の空氣のなかに混り充ちてしまつた。そしてそれは却

つて自分等の空想するのに便利になつてくれた。甘い幸福のたゞよひが、靜かに自分等のエスプリの弛緩した間隙から浸み込んで來た自分の考想は全くヴィジョンとなつた。それは霧のなかの太陽のやうに追憶を湧かせた。いま自分は何等複雜な考想も有たなければ、また未來と言ふことに就ても少しも案じない、考へてゐるうち自分のパイプの火は消えてゐた。自分が藁床のなかゝら出て來た時、友のシュタウブは飢に追はれて仕方なく夜食の献立をとゝのへるために煖爐の周圍で大騒ぎを演じてゐた。自分もまた非常に腹が空つてゐる。全く考へることが出來ない程に空つてゐる。わが友！君の献立がいかにうまかつたかを自分は言ひ表はせない。そしていかにして自分は、テーの大きな茶器を以つて、再びパイプに火をつけて藁床に横たはり乍ら明日の Rimpfischhorn の行路に就て論じあつたときのたのしさを永く記憶したらいゝだらう。

太陽はもう既に氷のアレートへと沈んでしまつて、夜と共に寒暖計は次第に下りだした。自分等のパイプの煙のなかに包まれて、自分等は尙も靜かにその討論をつゞけた。

Marcel Kurz.

"Autour de la Cabane Britannia," より

□

懶惰と夢想に送らるゝ Cabane の一日

黑い樅の怪奇なシルエットの浮く雪面の上に、自分等のこれからゆくべき Homeggli のカバーンはある筈である。これが夏の夜であつたならば、あのカバーンのなつかしい洋燈の火光は遠くから自分等を迎へて呉れるのだが、いまは雪がその孤獨な家を深く、高く埋めてゐるのである。自分等はこの月の明るい夜の行進を約三時間つゞけて漸くそのカバーンの閉じられた戸口に自分等の疲れを知らない木片を立てかけて内部へと入つた。

× × ×

眠覺しの時計の鈴が鋭い音で、自分等の吊床の安眠を破つた。新雪！理想的な粉雪！自分等の想像は的中してゐた。然し出發の間際になつて意地悪い北風は次第に忌むべき强風となつて、カバーンの屋根に打ちつけ始めた。樅の森ははげしく風にざはめいて、粉末のやうな雪は硝子戸にぶつかる。

終に自分等は今日の出發を中止してこのカバーンに滯在しなければならなくなつた。この滯在の一日、それは自分等にとつて退屈な、そして徒費さるゝべき一日であつたらうか？ いや、そうではなかつた。市街に住む自分等の平常のあらゆる習慣は、このカバーンの生活に於ては全く困却されてしまつてゐる。自分等はたゞ終日を全くの懶惰と

夢想に送つてしまつた。うなつてゐる煖爐の周圍に集まつて諧謔に富ちた談話に耽つたり、パイプの煙を卷きあげたりしてゐた。自分等はその長き午後にも、その一日の大半たる長き夜に於ても少しも倦怠することはなかつた。このカバーンの自分等に與へるある親しさと寂寥とは、自分をして、過ぎ去つた山旅の甘き回想と更にこの旅に對しての強いあにがれに心のすべてを委ねさせるのである。

× × ×

翌日、自分等は朝の光りのなかに全く悅ばしさうな、この自分等の小さい至樂鄕（パラディ）を出發して自分等の行程（トロット）に向つた

Paul Léon.

〜Dans les Alpe Bernoises-Annuaire de A. S. C. S. 1913.〜

木賊の秋

山を愛するわれわれは、山と人間との記錄に就て、特殊の興味を持たずには居られない。ほんとうの山岳小說は、山への憧憬の心を滿し、あるひは深める、家居の生活に於ける貴い糧である。われわれは、こうした山岳小說を、アンフレンドやアルネにばかり見出すのみならず、われわれの側近の山々に就て、われわれの言葉で綴られたものを、よく切實に欲するのである。此ののぞみは、山岳紀行文では到底滿し得られず、されば云つて宇野浩二輩の駄文では、尙更の事である。

で、誰が作つたともない古くからの傳說に於て、僅かに之を求め得たのであつたが、それも一通り味ひ盡してしまへば、そう續々新しいものが出るわけでないから、感激がうすらいで來る。

以前、藤村の破戒に信濃の自然、佐久の平、千曲川流域を背景に描かれた人間苦に、若い心を涙ぐませられたのであるが、近頃、文藝の筆をとらるゝことしげき正木不如丘氏の、木賊の秋（小說）野火（脚本）を得て、久方振りに、信濃の山と人との深い因緣話に、心を奪はれた事である。

共に同一のテーマを二つの形式に表現されたのであるが、わたくしは木賊の秋により强く引きつけられ

それは韋科山の木賊苅と不幸な兄弟とに就て書かれたのであるが、此の自然の轉變と人物とが、深く喰ひ合つて離れず、春の暮方、その山腹が野火に包まれる時の情景など、眞によく之を表現してゐる。

わたくしは、此の一篇を讀んで、近頃珍らしい山岳小說であると思つた。創作としての價値に就ては自ら言ふべき人があろふ、たゞ、山に憧憬れ、從つて信濃の國を忘れ得ざる吾々にとつて、此は實に得難い作であるとわたくしは痛感した。

（かの生）

山想斷章

加納一郎

―春―

×

原始のフィヒテン、ヴルドの中を鑛山への一すぢ道、陽はゆくての空を畫く梢々のスカイライン、いま超えたばかりのさわやかな線もて山へと向ふ人々の胸を射る。全空の碧色に心をのゝぎ、今日の登高に幸溢るゝを思はずにゐられない。雪道を踏む靴の音も朝なれば、ゆかしくきしりきのふに比し輕やかになりしルックの肩當りも心地よく、握るピッケルにをのづから力いりて、やがて精錬場をゆきすぐれば、ベチユラ、ピセアに代りてその艶なる姿もて我等をむかへ、小さき春の芽を數限りなくつけし枝の、何となく希望にふるへたるが如き感につゝまれ行く。

かくて森を離れ出づれば、廣やかなる十勝岳の斜面は、三〇センチのプルーフエル・シュネーに蔽はれて、展開する。きのふいたましく融けゆく雪に泥濘の殖民道路の一六キロに、スキーの重さ耐えやらず、とある農家に、そを預け來し悔恨に、深くとらはれつゝ、緩かならぬ新雪の山腹を、時に偃松のシュパルテニ足踏み込みては汗を流しつゝ硫黄の煙をあてに登る。風強き尾根は破片岩も裸はになりてとくつけしシュタイグアイゼンの重みを意識する。

自然硫黄の噴出が銀白の雪の斜面に赤熱の色なして流れ出で、まもなく乳黄色に凝結する奇異なる色彩のコントラストに、硫氣の鼻を衝くをも意とせで、幾度か見つむる程時と力に餘りありたりしが、噴煙もあとに登り行けば、峯は近く、雲の行き來もしげくなりて、エッケンシュタインの雪面に喰ひ入る心地よき音のみ傳はる。右手雲間に近くフラノ岳の嶮崖の、わづかに雪をちりばめたるを、振りむ

き、ふりむき、先人のきさむステューヘンを追ふ。
雪も斜面も、今想へばしかく嶮しきにはあらざりしも、小さきアルピニストには、つながるザイルも心うれしく、碧き氷に全くうづめられし三角標にまたがりて、大空の霧の中に手をあげて叫びぬ。
十勝岳の登預はシリベシマツカリヌフリのそれと共に、我が心に殘る山想の、ことさらに深く色づけられし頁なり

×

恐ろしきまでに晴れ渡りたる三月の末、十勝の頂を極めたる足を轉じてアシュペツヌプリへと志したのであつたがその頃はまだ、五万の地形圖もなく、山部から望むと西に眞上にその鋭い峯が頭を出してゐるだけで、その澤の配置や、尾根の登り降りは全く不明であつたと云つてもいゝ。
夏、二三のザンムラーが登つたと云ふその話しをたよりに畫き出した登路は山部村殖民區劃の十六線を奥へ夫婦岩を廻つて進まうと云ふのであつた。雪解の水に肥えた小澤は尚兩側に深く雪を抱いて、溯る足元をまたしても奪ふ森も密に、澤も狹くなり行く程に、朝まだき凍れる雪に心地よく滑りしスキーも、とある樹影に打ちすて、右に左に澤を究め行けば、朗らかに晴れたるに、長き眠りの熊も醒めたるにや、昨夜積りし新雪の上を大きなる足跡もて印しつゝ、行手へとつゞく、よく見れば小さなる獸の跡を追へるが如し、彼にとりては此の年の初獲物なりしか。
尾根に出づ。靜澄の春の大氣の中に、新雪の輝きまばゆく、瘠尾根はなほ大きなるコルニスを持ちつゝ續く。一つを超へ、一つを登り行けば、午後二時、急峻のギャップにはゞまれて行手はとだへ、惠まれし陽の下に、露はに、しかし雄々しくもそゝりたつ針狀峯の崇嚴を前にして、さすがに時の乏しきに暴舉をつゝしまざるを得ざりき。實にアシュペツの頂はその鋭峯を、六〇〇米の深谷をへだてゝ、逆光線の中に立つてゐた。胸にもゆる登高慾は此の氷と岩の彫刻の前に未だ嘗つて覺えざる寂滅を感じたのであつた
峯は針盛、夕張の峻嶮を背にして王者の樣に北面してゐた。アンザイレンした五人は峯を仰ぎ、谷を俯し見ては時の矩きを悲しんだ。

×

アシュペツの惱みは、數枚のヒルムにをさめられたまゝ次のシーズンまで持ちこされた。此の春ヌタクカムシュペに數日反復の努力も空しく頂を究め得ざりし足を轉じて再びアシュペツへと向ふ。既に五万の地形圖を手にせる我輩は、前年の轍をふまず、殖民區劃二十五線の奥を左の尾根へ、ラウイーネン・ゲフエーリフヒな斜面を登り、ポントナシペツ川をへだてゝ針盛、芦別間の連嶺を左に見つゝ、瘠尾根を西へ〻眞直に向つたのである。折柄の烈しき南風

は山の彼方十勝平原の、既に雪解けて乾きたるを吹き超え來りて、雪は砂塵にそまりて見苦しき色をなし、高き氣溫に軟げられし表層にスキーの重さも一しほに思はれた。北地のいづこの山にても殆んど例外なしに形成せらるゝブルドゾーンを順次、エゾマツよりエゾノダケカンバと拔けきれば雪も、裸はな日射と低溫に凍結して、穿き換へしアイゼンの感觸も心地よく、風は更に烈しく吹きつのれど、空にはかすかなる雲もなくて、一歩一歩に登高の快味を覺えつゝ、打ちふるピッケルの尖を見つむる心の悅びはいよいよ深めらる。

峯頂に登る。前の年寫眞にをさめ歸りては幾度となく、心に畫きしその峯の頂に立てり、四圍の峯々は烈風の中に雪崩の跡をとゞめて連る。

遠くかすかなる裾野を引きてオプタテシケの連嶺は稍傾ける靑陽の下、慈愛あたゝかき大氣につゝまれて、その淸雅なる姿をわれにかくさず。夕張の峯はそのたけき勢もて、南の空、此の烈風にをのゝぎもせず、嚴かに冷かに立てり

谷々の小さき流れは雪解の水の、さゝやき合ひて野へ、海へといそげるに、此處僅か一七二六メートルの頂には、まだ春の女神の訪れぬか、凍れる雪のさらさ、そと足元にくづれ落ちて、常冬の國ぞ想はる。

船形山より泉岳へ

額田　敏

大正十三年五月十一日—十四日

同　行　町富深藏

人　夫　早坂三藏

登行記錄

十一日　午前八時三十分　仙臺片平町

午後五時四十分

十二日　午前七時小屋出發、午前九時桑沼、午前十時升澤、午前十時四十分權現堂、—午後四時三十分船形山頂上、午後五時三十分露營地

十三日　午前七時露營地發、午前九時三十分三峰三角點

午後四時四十五分、北泉岳頂上三角點、午後五時四十五分小屋

十四日　午前八時三十分小屋發、午後三時仙臺片平町泉缶小屋まで

十月末より雪が來て、翌年の七月頃まで幾條かの殘雪は谷を埋め、仙臺の北に每日朝夕登高の心をソゝツて居る泉船形の山々。何時かはその尾根傳ひをやつて見度いと絕えず考へて居た此の山々。泉岳に登る度に直ぐ前に展開さる

ゝのを見てはいつも堪らなくなる此の山々。去年の五月定義より大倉川を溯り船形山に登つた際此の尾根傳ひの事を聞きしに殘雪の多い四月頃ならば行かれるが雪が消えると一寸困難だと云はれたのが頭の中にある。今年も四月となつて北泉まで登り三峰に續く尾根の有樣を眺めた處によれば未だ雪が澤山で大した事も無さ相に思はれた、歸途山中の小屋の人々にも種々聞えて近々やつて來る事を賴んで置いたのであつた。

幾日も〳〵も晴快な日は續いた、山の雪は日に日に解けて行く。且つて約束して置いたFは四月の末となつてやつと歸つて來た。二人で買物などの相談もし日をきめて愈々五月十一日出發と定めた。

泉岳と北泉との間、標高九五〇米の邊り夏冬を通じて住むと云ふ山人の小屋。前の小池に泳ぐ岩魚の群、殘雪の下を潛つて流れ込む水音にのみ邊りの寂寞は破れても山中の靜けさは更に深い。

小屋に着いてリュックサックを下し爐邊で暫らく休んでから其の附近を散歩して見た。北泉のソヽリ立つ鬱蒼とした急傾斜面、その下に延びて居るなだらかな牧場の草原、この中に處ろ〳〵に立つ白樺の獨立樹林の中に隱見する炭燒く竈の二つ三つ。夕色の迫る此の高原に二人は靜かに立つて山の方を見詰めて居たが互に顏見合せて一時に、いーねー……こゝは……。

木の幹をクリ貫いて造つた丸太風呂の湯槽、炭火で焚いたお湯　此の中に浸つて風呂槽に頭を持たせ雲間にもる星の二つ三つを見る。山に成長た芋のトロヽ汁は疲れて、空いた腹に幾杯か入つた、山獨活、山葵の御馳走も珍らしいものであつた。

明日行つて呉れると云ふ三藏さんも爐邊で山の話をポツリポツリとやつて居る。雪が小屋の軒を埋めた頃、吹雪の日などには朝から風呂を立てゝはいり、爐邊で串に刺した團子など燒き乍ら木に鳴る風を聞えて居ると何とも云へない感じがする事や、吹雪も過ぎてからの凍つた雪の上を橇で薪や炭を運ぶ時氣持よく滑る事、羚羊を一度に六つも捕つたと云ふ事など話はそれからそれへと盡きない。スキーで冬來た時は賴むと云ふ事や、雪上を北泉を越して船形山の方へは天氣を見て行くならば一日で往復が出來ない事もないと云ふ事など來るべき次の冬の事など賴んだりした。その夜は雨の音に度々目が覺め明日の天候が心配で堪らない。

船　形　山　へ

明けて見ても空は怪しい、北泉の山容も霧に隱れ勝で小雨さへ降つて來た、お互に無言の内に三人はその小屋を出た、（午前七時）

北泉の山腹を東から北へと廻れば向ふの開けた平かな所へ出る、そこから山毛欅の森林中を林道に沿ひて桑沼まで來れば天候は益々怪しくなつて稍大粒の雨が時々やつて來た。沼の周圍を廻らして居る林の新緑もこの雨では燃ゆる相もなく雲霧の中にぼけ込んでこれを寫して居る水色と共に靜寂に凄味がある。水の中には蝶蝦の幾匹かゞ泳いで居た。泉岳火山が噴火して、その爆裂の際火口趾に溜つた水が此の沼となつて碧を湛へて居るのである。小倉氏地質調査報文に依れば「周圍一千二百七十米、南北に長く東西の直徑に比し約三倍大なり、北泉ヶ嶽の眞北一千五百米の所にありて海拔七百五十米の水面を有す、湖岸は崖をなし直ちに深きに至れども里人の言に依れば餘りに深からず……云々」湖岸崖をなすと云ふことは少し當らない樣で水渚足の浸る所を巡ることが出來る。泉岳の小屋からこゝまで二時間、その間殆んど天を摩す山毛欅の森林、下に敷く落葉は踏む足裏に氣持よく反動を與へて呉れる。この美しい大自然林も何時かは人の手に持つ斧によつて荒涼の草原と化する時の來るか……と頭に浮ぶ。靜まりかへつて居る此の山毛欅林、そのところ〴〵に大木が倒れて朽ちるまゝになつて、その上を飛び越えて行く程に右手の斷崖から途中の岩角に激しつゝ落下する高さ五六十米もあらんかと思はれる瀧の下を過ぎると傍の立木に「割山瀑」などゝ記してその下に通つた人々の名を四ッ五ッ刻込んであつたのを見て、林間に小さな一見水溜りの樣な沼を三ッ四ッ過ぎる度毎に人夫は、これは何沼あれは何沼と說明して聞かする其内には三本櫻沼と云ふ名もあつて其の岸には山櫻が咲いて居た。杉苗を負つて上つて來る里人にも出會ひ、荒川を渡つて升澤にまで來て道の邊の垣根に背を持たせて小憩す（午前十時）

こゝより船形山への登山道のなだらかな傾斜を登り行けば池や沼が二ッ三ッ。雪の消えて間もない枯草の上に馬が二匹腹這ひながら通つて行く吾々を眺めて居る。コンモリと茂つた杉の森、その下のお堂が權現堂。こゝで食事などして居るうちに大倉山の新線が日に燃えて來た。篠の中に通ずる山道は稍急となつて來て荷を負ふ身には汗が流れる傍の倒木に椎茸の群生じて居るのを見付け、露營の御馳走にとリュックサックの中に入れて登る。木の間を通して大倉山北面の斷崖もよく見え、右手の花染山には雪が未だ斑にある。朝からの陰鬱な雲はスッカリ晴れて、踏む殘雪も亦氣持よく感ずる樣になつた。夏は硫氣を噴いて居ると云ふ湯谷地邊りはまだ一面の雪。木の間を通して船形の頂とこの北に續いて少し尖つた藥師ノ森とが雨上りの澄み切つた空にクッキリと浮んで、その右の方に窪地を隔てゝ前船形山が殘雪の腹を日に輝かして居る。千本松山邊りから荒

川の谿谷を隔てゝ蛇、三峰、それからひとたび下つて再び北泉へと聳へて居る尾根もよく見えて、北泉の山頂は尚名殘の雨雲が空に捲き上つて居る。吾々出發の前日に襲來した低氣壓は此の山々には雪を降らし、泉の小屋では下駄の齒跡がよく付く程降つたと云ふし、こゝら邊りの殘雪の上には尚一寸餘りも新しい雪で掩はれて居る。草鞋に付けた金樏の齒がサク〳〵と雪の中に食込んで登つて行く氣持、Fが先きに登つて行つたその跡、雪上に斜陽を受けて影を長く曳くその後姿、船形の頂（イタベキ）近い此の雪の上の景色、思はず自分は立ちとまりカメラを覗いた。

船形山と蛇ヶ岳との一小鞍部にまで登り、雪上に頭を持たけて居る灌木の枝にリュッサックを吊して置き、這松、躑躅、黄揚、石南花、熊篠の混り合つて居る藪に入つたり雪の上を渡つたりしつゝ夏の登山道と再び合し頂上の御所山神社の前に午後四時半着いた。船形山は亦御所山とも云ふ御所山は五所山に因し、船形、高倉、赤倉、駕籠、荒神の五山を祭るが故にかく稱すとかや。

社の後方一等三角點（一五〇〇米）に登れば月山が夕日に頂上の雪は淡赤く輝く。白髪（一二八四米）楠（一二一〇米）仙臺カゴ（一二六〇米）最上カゴ（一二二〇米）は西に尾根傳ひに眼の下に、寒風山（一一一七米）面白山（一二六四米）大東嶽（一三六六米）それから神室、雁戸之れに續いて一段高く藏王の連山の山姿はその谷々に雪を殘して西南に遠く延びて居る。それらの連山の向ふには山形の平原が最上川の銀糸を曳いて模糊として居る。その上に更に遠く朝日、以東、に續く山々が白い屏風を青空に立てゝ下は霞にぼけて居る。

船形の山頂は北に延びて藥師ノ森となりて稍々尖りその左へと續く尾根は荒神山（一二七〇米）の兀々した山容が聳え、更に黑森（一〇八二米）となつて西北は遠く粟駒火山に續く、西は急傾斜をなして深く丹生川の谿谷を隔てゝ柴倉（一〇〇四米）黑伏（一二二七米）山が荒神山に相對して居る、北から東北にかけて前船形（一三一二米）花染山（一〇一八米）が窪地の向ふに殘雪が光る。蛇（一四〇〇米）三峰（一四一七米（北泉一二五三米）と東南への尾根は明日行くべきところである。

後白髪（ウシロシラヒゲ）（一四二二米）と楠岳との間、深く刻んだ大倉川の溪は去年溯つた記憶を呼び起して何となくなつかしい。升澤より船形山への登行は道があり樂な山として印象を與へて呉れた。定義より大倉川を溯り、此の溪の上流で見た楠嶺、仙臺カゴなどの急峻な山肌と相對してより一段高い船形の山容を眺めては奥深い容易に人を近付けぬ山であつた。

この山頂を降つてリュックサックを置いた所まで來れば

雪の表面は凍り始めて居る。此の鞍部を少し北側に降り保野川の源をなす一つの溪、殘雪の間に水の流るゝ所を見出し露營地と定めた。人夫は晩の薪切り、吾々二人は天幕張り食事の用意Fは途中でとつて來た椎茸を洗つて居る。今晩は御馳走だね……とよべば……ウーンと答へつゝ熱心に洗つて居る。半月に照らされつゝ食事も終り、持つて來た防寒具は皆軀に付け足を焚火で温めつゝ三人は一枚の毛布にクルまつた。而し寒くて眠られない。Fは足袋を乾かしつゝ其まゝ暫らく眠つた、其の間に片方の足袋が燃えてしまつた。朝こゝを立つ時燃えた足袋の代りに脚絆をグル〳〵足に卷き付けて居る……おいその足は丁度癩病患者ソックリだぞ……と云へば……そう云ふなよ、何とも仕方がないのだから……と云ひつゝ卷き付けて其上から草鞋を縛り付けたゝ足場を切つて一歩一歩と雪上を渡つて行つた。切つた足場の淺かりし爲か、それを踏んで居た足が滑つたためか、シマッターと思つた時は早や一、二米も滑り落ちて居た。杖で制働をかけても駄目、六十米餘りも滑つて熊篠の中に滑り込んでやつと止つた。そこでガサ〳〵モガイて居るとFも亦滑り落ちて來た。そうして猛烈な速さで熊篠の中に飛び込んだ。聲を掛ければ大丈夫だと云ひつゝ篠を分けて居る。やつと此の雪を渡つて振り返ると自分達の落ちて止まつた篠の藪は今數尺も滑れば今度は谷の下までボールの樣に轉び落ちた事であつたらうと思はず顔見合はした。人夫も後から山刀で足場を切つて渡つて居る、その振り上げる度にピカ〳〵と山刀は光る。この雪で思はず時間をつぶして又藪潜り。人夫は吾々より少し下方を廻つて先きへ三峰と蛇との鞍部を越えて三峰の上り口に待つて居る。今の所に羚羊が一疋居た、上へボイやつたが氣が付かなかつたかと問はれたが何も見えなかつた。

三峰の大坊主を越して中坊主の頂上、三角點のある所で食事をとる（午前九時三十分）邊りの景色をスケッチしたり、三角點を枕に横臥したりして居るとその背中からはほか〳〵と温味を感じ、現實の憂苦をはなれ、只登高の念に滿ち切つた後の疲れの快感を味ふこの時程幸福の刹那はない。

尾根傳ひ

凍つて居る雪の上を蛇ヶ岳へと登り行けば月山の雪が西の空にギラ〳〵朝日に輝く。今日は何と云ふ立派な日和だらう。昨日朝立つ時の陰慘な氣分に比べると實に晴れ〳〵しい。蛇の一つの頭の北側を廻れば東北に面して急傾斜面にズッと下の谷まで續いて居る雪が現れて來た。雪上に立ちて右手を側方に延ばせば直ぐ雪を掴むことが出來る。Fは灌木に腰を掛けて裸を付けて居る、其の間に自分は裸を取り出す面倒さに木を切り杖を拵らへ片手に山刀を持ちつ

後白髮（ウシロシロヒゲ）は直ぐ眼の前に、横川の谷を隔てゝその山腹は新線から灰色の山肌へと次第にほけ上つて上の方は尙雪の中に冬其儘の木立の林である。この頂上から今一つ小坊主を越して藪を拔けて下れば平かな殘雪の一面にある山毛欅の森林となる。人夫は中坊主の三角點の所より小坊主の南側の腹を下つてこゝにやつて來て休んで居た、吾々二人は小坊主の頭を越して同じ所に來た（午前十一時三十分）

蛇ヶ岳よりこゝまで續いた藪は昨日船形山の登りに於けると同じく這松、躑躅、黃揚、石南花、熊篠が混り合つて居るもので、その三分通りは吾々の頭が隱れる位のものであつたが、その後は胸位までの高さのものであつた。處ろ〳〵に將に綻びんとする蕾をつけて居る山櫻の可憐な姿も交つて居た。

午前中に三峰を降ることが出來るならば……とは人夫の昨日から度々言つて居た事であつた、その通りになつてスッカリ安心したのか彼は倒れ木の上に臥し遂に鼾聲を上げて眠つた。Fと二人はコヽアなどとり出して雪と砂糖とを練り之にコヽアを加へてチョコレートだなどと云ひつゝ食べなどして居たが其内に各々横になり夢の樣に上に來て鳴く鶯の聲を聞きつゝ一時まで休んだ、人夫を起せばあまり早く小屋に歸つても仕樣がない丁度風呂の沸く頃に歸り着いて直ぐ湯に入るのが一番疲れがぬける……などゝ云ひつゝ立ち上がらない。

今の長い休憩で元氣付いたかして重い荷を負つた人夫の雪の上を飛んで行く後から續く我々は熊篠の中を顏や胸を引ッゝかれつゝ行く。途中今一度食事を爲し荒川に注ぐ澤を渡つて愈々北泉への斜面を登り初めた。吾々二人は先きに立つて熊篠を分けて行く內に人夫と分れ〳〵となつた。吾々が頂上まで篠の中を登つて行けば彼は先つきより玆に來て休んで居る（午後四時四十五分）

北泉の頂上に來た！。途中露營三泊は爲なければならない覺悟で、それに尙餘有を見て持つて來た食糧は尙重い荷である。それが只一晩の露營で濟んだとは餘りにアッケない感じもするしまた愉快にも感ずる。通つて來た尾根には處ろ〳〵雪が白く見える。昨日より今日まで廻つた山々はこゝからよく見える。

北泉東面の急斜面を直下して小屋に歸つた時（午後五時四十五分）は風呂は焚き付けられて居た。爐邊で解いて居るFの片足の脚絆も大分破れて居る。自分の足袋の甲はほろ〳〵になつた。雨に眠りから覺まさるゝこともなくその小屋の夜は早く明けて、外の手桶には氷が張つて居る。荷物を整理をして居るとFの山刀が見えない、リュックサックのポケットの底は破れて居る。

朝の光りは泉岳の新線に燃えて、草原の白樺は白く輝いて居る。

（終り）

春の中山ゴシツク

君一生

短いやうで長い氣持のする山の七日間、それが私共の山の小屋でのレーベンの豫定の日數であつた。所があたら天候不順と云ふ四つの文字の爲めに、とう〳〵三日も延びて十日間を過ごさねばならぬことになつた飽腹は倦怠を誘ふと云ふことは、誰も知るところである。

變つたところへ出掛けて平凡なことばかり續くと、終ひには居たゝまらないほど倦怠を覺えてくる。倦怠は容易に平凡を構成する。逆も亦眞である。平凡な生活を送つた山の十日間は、それであつた。

始めの大きい目的や、豫定が一向にはかどらない。だん〳〵陰慘な氣分が皆の心の中に喰ひ込んでくる。もう靜かに山を眺めて居る勇氣もなくなつて行き相である。そしてたゞ心の尖(シユビツツエ)を益お互が、礪いで居るやうにしか考へられなくなつて行く。天候不順と云ふ文字の表はす感じが遺憾なく人間の心の中に喰ひ込んで來て居る。誠に大きい力をもつて居ることを今更感ぜられる。

見事失敗に歸した中山の十日間の計畫。考へれば殘念であつた。然し失敗の前にどれだけの忍耐を續けて居たか、一行の氣持を察して頂きたい。

私共の計畫が失敗しても、決して中山峠のスキートウレンの愉快さは失はるゝことがない。人間と云ふ小さいものゝ力で現實的に失敗と云ふことが、構成せられたにしても、大きい〳〵〳〵自然の有する美しい(スタンバイ)像の力は到底失はれつこはない。

K氏も前に清緻な筆をもつて北海道の中山峠のことを染め出されたことがあつた。その感じは中山へ出掛けて行くものが一樣に抱くものであつて、亦中山へ出掛けて行くものにのみ許し與へらるゝ天惠である。

美しいタンネの森は谷より谷へ、峯にまで進んでテレースを埋めて飽くことのない環境に、血に躍る若い男を誘ふて行くであらう。

又タンネとベチユラの交錯するところには必ず廣い〳〵眞白なラウムを作つて、心ゆくばかりの滑走の快味を、大きい〳〵自然は、小さい〳〵人間の心に惠んでくれるであらう。

夫れらは凡べてヒユツテニにまで行きつくトウリストの苦痛を充分に甦して餘りあるものである。

自分の知るつたけのスキーテクニツクを完全に活用して、へト〳〵になるまで享樂を與へてくれる中山峠

疲れたランナアに靜かな憩を惠む中山の小屋！

中山の小屋を中心にこれを圍む凡べては、桃源の里を形作つて居る。

實に中山峠は吾等のパラダイスである。

嗚呼 Erdlado 中山！

自然のお叫びを聞きつゝ、七人の寄りも寄つたアブノルマルな人間がこの中山のパラダイスのヒュッテエに立籠つて、十日間と云ふ日を、誠に平凡の樣で、奇異な生活を過ごしたのである。

お互の生活や環境が異つて來た爲に、此處で急に一共に共同生活をしたからとて、頭の中に畫いて居るこのヒュッテエ生活の記憶が、同じいものであると云ひない。

然しラインな氣持と、融合的な心合ひは慥かに共通のものである。

僕が此處で書出すことは、ほんの中山行の出來事の一端を平凡な寢言の樣に綴つたものに過ぎない。然し少々露骨かも知れぬが、まあそこはどうか堪忍にして欲しい。

× × ×

事は青山温泉の春の合宿からの續きである。

この四月故郷で結婚の盛儀を擧けるんだと云ふて、三月十九日からの青山温泉の合宿から、毎日日燒けを拒いで、顏にアンチラックスを塗つて居るヘチマのお化けが、中山行の一行に加つて居たからたまらない。

何だい。中山くんだりまで來て未だお顏のお化粧か、いくらベタ〳〵塗つたつて、黑い顏はトッテモ白かあならないよ。

馬鹿だなあ、人はハトラアテンの話の出ない内から、少しでも關係じみたことが起ると、生地を見ると吹き出したいやうな顏をして居る男でも十人並に見せかけて相手にお互に振られまいとして、躍氣になると云ふのに、別段大したローマンスもなく取纏められた後で、しかも四角張つて「ウー高砂や……」なんて腹で鳴き出す日取りも近いのに、むきになつて顏の日燒けをふせがうと、壯士役者のするやうな厚化粧とは、どう考へたつてノルマルな人間のする仕業と思はれない。

んだから「人參の白合ひ」だなんて云つて皆が野次るのか、燒くのか判らないが兎に角ヤンヤと囃し立てると、御當人「マアさう燒くなあつて、その内に經驗學を講義してやるから」との言ひ草。周章るなよ

× × ×

怨むなて、綽名位つけられたつて昔や秀吉だつて猿だなんて言はれたし、ボンヤリした顏をしてるんでピンボケなんて云ふ名さへつけられた奴があるぢやないか。

だけど一向意味もなさず、緣もないのにそんな名をつけるなんて失敬ださ、ウツースース

咽喉を鳴らして鼻の下の毛羽(ケバ)がス
ース音を出す、
いや未だ大分堅い方だなあ。綽名なあんて何處から生れるものか知らんらしい。甘いと判つて喰つて見て始めて甘いと我點する輩と同日だなあ。甘いときまつて居るものは喰はぬ先から甘いと云ふことが判つて居るんだよ。猫は始めから猫だよ。誰も猫を見て鼠と呼ぶものはありやしないよ。
辛い樣だが、喰つて見たところが甘かつたと云ふところに、本當に旨いと感ずる甘味が唾液を誘ふんたよその何となく旨い。言ふに云はれぬ味がすると云ふところに本當の物の價値があるんだよ。
そこだよ、綽名の妙味も
誰かだつてテットも本物と比べたら飴玉どころぢやないが、何處となく飴玉らしいちゆうんで飴玉なあんて云はれて居る人があるぢやないか

一体綽名なんて云ふ奴は、お役所の何々書式と云つたやうに、チャント規定があつて、顔の圓いのは飴玉とし、毛の深いのを熊と呼ぶべしなんて云ふんであつたら兎も角、漫然とつく綽名こそ、本當に妙味があるもんぢやないかなあ
まあさう口を尖らして怒るなて、低い鼻が益々ペシャンコになり口の先が柄の樣になつて、見られたもんぢやないぜ、漫談を眞向ふから怒る奴があるかぇなあ、だから杓子なあんて名がついたんだよ。まあ怒つた時の顔を鏡の前に持つて行つて見てごらん、何處となく杓子らしいよ。

× × ×

又味噌汁かあ、穢いものを喰ふねえ、
へッー。ごつちが穢いものを喰ふかね、御飯にたんまり砂糖をぶつかけて、ミルクをかけてそれにココアを盛りあげて、もう一つ念入りに紅茶を注いで喰ふのが善食かね。まるで何處かの寄宿舍の殘飯見た樣な色のした喰物。
殘飯は少しひどいなあ。然し殘飯より優しだとはどうしても考へられないなあ。否殘飯を食ふ樣な奴はどうせアブノルマルな人間でないとすると、その殘飯よりひどいものを喰ふ人間は一体アブノルマルのダッシ附きかなあ。
然し外國へでも行つたら、きつとこんな惡食の奴が却つてもてるかも知れん。だけど毛唐の眞似をいくら旨くやつても、日本人は日本人だからなあ、
まあ俺は日本人だと云つて、大きいことを云ひたかつたら是非國粹保存ぢやないが、味噌汁位吸はなきやだめだよ。
だけどね、味噌汁でも味噌の臭味がなければよいんだがね。
馬鹿あ。味噌で味噌の香ひのしな

いものがあるかえ。
なあ直洲醍醐味噌はくさくないや
あなあ、
ウンニア味噌らしい香ひはするさあ。
コラいけねえいや。

× × ×

懲罰々々。前代未聞の懲罰だ。
何だ〳〵。
いやカニとシヤクシがスロープの途中で眞晝中怪しからん振舞ひを演じたんだ。樣するに大懲罰々々々。
猫盛んに懲罰を說くと、横合ひからカニとシヤクシ、お互に相手の衝突のみを嘆じて、樣するに偶然性なることを辯明す、
然し何しろ相手が相手だから、皆が承知しない。とう〳〵合意の衝突合意の轉倒と云ふことになつて、多情な杓子危險物扱ひとなる。毒舌のクン早速その晩、妙な唄を歌ひ出す
所もあらうに中山で
人も知つたる蟹杓子
小屋の近くのスコープで
右と左のテレマーク
バッタリ出會ふて抱き合ふた
山の上から猫ニヤオン

暗夜に物すると云ふ食肉類の代表猫ー。兩眼の注味深く輝くを以て特徴となすと聞く。
費となく夜となく、陽光の照を受くると受けざるとによらず、事の起ると見れば、忽ち燦然鋭光を飛ばす烱眼の持主、さながら食肉類の猫に似たるもの一行中に加はる。
口さがなきサボテン呼んで「猫」となす。
黄泉の國に裁斷を與ふる閻魔の如く公正なる採決によつて、ヒユッテンレーベンのサボテンの懲戒をなす誠に極勞なることであつた。
（二四、四、二〇）

山岳界消息

◇横有恒氏は去る五月秩父宮殿下立山登山の案内後、同月十五日東京發、青島へ赴任せられたり。

◇慶應山岳部にては本年度幹事として左記四氏就任せり

西川不二雄（新任）　中村邦之助（新任）

本郷常幸（新任）　田中三晴（重任）

尚同部にては同部年報「登高行」にかへて、同部の創立十週年記念のために今秋、單行本の形式で專ら同部員の筆になるものを收錄刊行することに決定せりと聞く。

同部の田中三晴君一行は五月下旬、飯豐山を會津口より登頂、西ヶ岳に達せる由。

◇北大スキー部員の一班は石狩岳方面（記事本號記載）に、他班は群別、暑寒別岳の縱走を、何れも五月下旬サンマースキーにて行へり。

◇故板倉勝宜君遺稿並に書簡は、友人松方三郎氏の努力により近日上梓せらるゝ運びとなりたり。右願布方希望の向は同氏又は本會宛豫約方照會せらるべし。

◇北海道山岳會は今回左記諸氏を幹事に選任せり。

鹽澤　健　　沖野丈夫

尚同會に於ては本年度第一回登山を樽前、惠庭方面に開催、參加者多數盛大なりき、

◇去る五月國民新聞紙上に Tödi の登山記を載せられたる麻生氏は、一昨秋主として登山の爲にスウィスに赴れ主に Zürich に滯留してアルプスの各山群に數多く登攀されて昨秋歸朝さる。特にジルヴヒツタ、レエテイコン山群、トウエーディ山脈、ベルニナ、アルブラの山群、瑞西北東の山群、ペンニンアルプス等の各主峯を殆んど登りつくされたる由。

◆各高等學校夏期計畫

北大豫科旅行部

第一班　蝦夷富士、洞爺湖、駒ヶ岳

第二班　支笏湖、惠庭岳、樽前岳

第三班　飯豐山、大日岳

第四班　余市岳方面

第五班　利尻島、禮文島

第六班　夕張岳方面

第七班　大雪山彙A班

第八班　大雪山彙B班
第九班　ペンケペタン川上流
第十班　十勝川上流
第十一班　石狩岳方面
第十二班　北日本アルプスA班
第十三班　北日本アルプスB班

松本高等學校山岳部

第一班　常念山脈、槍・穂高縱走
第二班　槍・烏帽子縱走
第三班　針の木越之、立山、劍岳、黑部
第四班　後立山山脈縱走
第五班　笠ヶ岳、藥師岳縱走
第六班　木曾山脈縱走
第七班　仙丈岳、東駒ヶ岳山脈縱走
第八班　白峰山脈縱走、三峰川下り
第九班　赤石、鹽見岳縱走
第十班　光岳、赤石岳縱走

第八高等學校山岳部

第一班　燕、常念、槍方面
第二班　白馬、大池方面
第三班　烏帽子より槍への縱走
第四班　針木、立山、劍、白馬縱走
第五班　藥師より槍への縱走
第六班　後立山山脈縱走
第七班　木曾駒山脈縱走
第八班　淺間山より八ヶ岳へ
第九班　白根三山縱走
第十班　赤石山脈縱走ミ遠山川跋涉
第十一班　立山、劍岳、黑部川方面
第十二班　上高地天幕生活

□研究會。「山とスキー會」にては、從來の水曜日例會を研究會と改め、五月十四日より毎週水曜日「山とスキーの會」に於て開く。

第一回研究會　五月十四日

來會者

中野、岡村、平塚、藤江、廣田、佐々木、伊藤、小川、阿部、田中、赤松　（十一名）

研究事項

「山地に於けるスキーの實際」（本誌三十八號記載）について討論「ステムターについての考察」（三十號記載）（說明中野）「シヤモニースキー大會の記錄に

ついて」
（解説廣田）

第二回研究會　五月二十一日

來會者　加納、長谷川、阿部、伊藤、岡村、廣田、緒方（直）、赤松、小川、（九名）

研究項項

一、一九二四年インタアナショナルスキーコンペテションの記錄の一部につきて（解説の廣田）

二、本邦六地方（伏木・新潟、山形、青森、札幌、眞岡）に於ける降雪狀況に關する氣象學的考察。

第三回研究會　五月二十七日

來會者　本田、松川、阿部、加納、伊藤、岡村、平塚、廣田、小川、赤松（一〇名）

研究事項

一、一九二四年ドイツスキー選手權大會について
（解説岡村）

二、安東君遭難後死体搜索狀況について（説明松川）

第四回研究會　六月四日

來會者　岡本、小川、赤松、佐々木、長谷川、田中、宮澤、高杉、山口、田口、阿部、寺田、岩森、加納、小森、内海、牧野、廣田、藤江、本田、岡村、板本（兄）、板本（弟）、伊藤　（二十五名）

研究要項

一、石狩岳方面紀行報告（説明藤江）

二、安東君の遭難當時（説明山口）

第四回研究會　六月十一日

來會者　廣田、牧野、小森、佐々木、赤松、平塚、阿部（謹）、高杉、須藤（宣）、宮澤、田中、長谷川、加納、緒方（直）、阿部、伊藤、小川、藤江、田口、岡本、岡村　（二十一名）

研究事故

暑寒別岳方面紀行報告（説明高杉）

國際スキー聯盟規約報告（説明加納）

クリスチヤニアとテレマークの實際的用途（討論）
（説明岡村）

夏期大學

□北海道林業會に於ては來る七月廿五日より七月卅一日まで石狩平原中の丘陵林たる野幌原始林に於て林間夏期大學を開催、一切天幕生活を以て眞に自然に接觸せる野趣豊富なる計畫を立てつゝあり、既に講師の決定せるもの左の如し。聽講料金參圓

世界の文化と森林の民衆化　林學博士　本多靜六
自然美と森林美　林學博士　新島善直
氣候と文化　理學士　田中館秀三
氷のあらし　ドクトル・オブ・フイロソフイー　西村眞琴

□北海道山岳會に於ては來る八月十二日より十日間定山溪温泉より登別温泉に到る、移動夏期大學を開催、各地に大講演會を開く由、既に講師の決定せるもの左の如し。聽講料金貳圓

北　昷吉、阿部次郎、後藤文夫、牧野英一、末廣嚴太郎、吉田絃二郎、松村松年、高岡熊吉

心の飛躍

個人の性格に依つて、山の味ひ方に差異が生じてくるのは自然である。從つて澤から澤へ谿から谿へと青白くきらめいた月光と共に靜かに自分の進むべき道を求めて行く樣な靜的な山の味ひ方も勿論存在すべきである。けれどもかかる靜的な山の味ひ方には、心の飛躍の些かなる片影をだも見出すことは出來ない。從つて常に心の飛躍を求めて止まないものは、勢ひ動的な山の味ひ方を求めざるを得なくなる。ロッククライミング、スノーラフトー動的な山の味ひ方の眞劍味は、板さんが短いながらも正確に表現してくれてゐる。心の飛躍はまた心の發展進歩をも意味する。進歩發展を望むが故に、常に新しきピーク新らしき登路をも求める樣になる。まこと常に新しきピークをのみ求めて止まざる者こそ眞のアリピニストであるといふある登山家の言葉もかくて出來たのであらふ。とまれ私達はいつも山のことを考へてゐるといふ誇りを持ちたいものだ。私達は自らの力を誇稱するものであつてはならないが然し、譬へ山に對する經驗智識は淺くとも、いつも山のことを考へてゐるといふことは、アルピニストにとつての誇りであらうと思ふ。

（いさう生）

× × ×

「お酒と奥さんに溺れぬやうに」

斯うゆうことがつい此間着いた「„Ski"」と云ふ雜誌に出て居たFreund Springer, und noch eines, Ziehe alle deine Denkkräfte zu Rat und denke auch sehr klar über Wein und Weib, sowie über Nahmng.

この文章を見ると一見して、外國のスキーランナアの云ふことと、私達否日本のスキー家達の云ふ言葉に變つたところを見出すだらう。

否日本のスキー家ばかりぢやない、日本の運動家と云つてもよいだらう。

何しろ外國(アチラ)では親父になつてもスキーを穿いて山へ行つたりジャムブをやつたりすると云ふから素張らしい。大部日本と桁違ひの樣だ。然し運動家が、フラウを貰ふと、少しは衰へると云ふことは、東西にも共通な事の樣だ。

運動家でフラウを持つて居る人が、決して今更目について來た譯でもあるまいが、是迄の運動指導者が、たゞフラウを持つ樣になると駄目だと云つて居た位で、大抵ならこんなところはWein und Rauchen' と來るところだが Wein und Weib と書いて、「お酒と奥さんに溺れぬやうに」と飾り氣もなく云ひ切つて居るところが、何とも云へぬ感じを與へて來れる。

「選手と宿舍」

是も亦隨分問題になることで宿は金の都合で大抵旨く話がつくものだが、それでも選手のもつ感じと云ふものは、一寸金なんぞで解決のつかぬものであるそこを良い鹽梅にしやうとするのが、選手の上に立つ監督といふ人の苦しむところだ。宿の善惡なんぞと云ふことも、宿舍の主人の氣取りで、可成り支配されるものである。

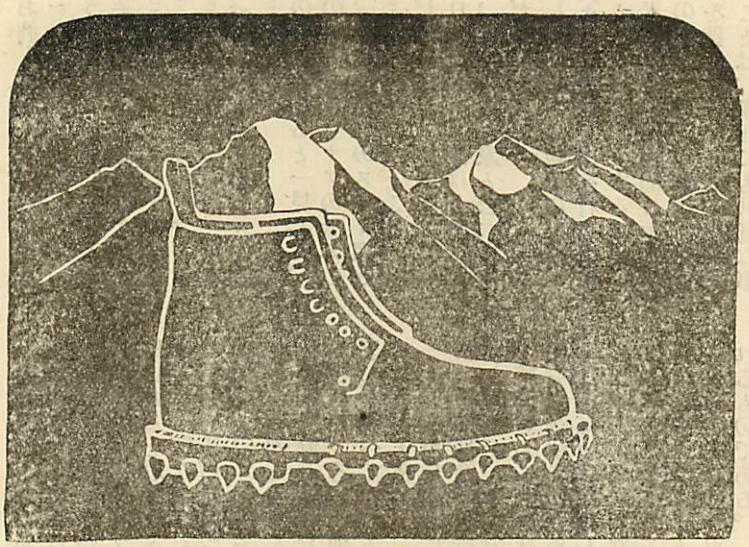
この宿舍の選手のことでも、ついこの間の „Ski" に出て居たことだが、此間佛蘭西のシャモニーで開かれたウインタアスポーツで、之に參加すべく出掛けたスウィスのスキー選手が、宿舍とその待遇について次の樣な不平をもらして居たやうだ。やつぱり之も洋の東西に變りはないやうだ。

Die unterkunft war dann nicht schlecht, während die Verpflegung sehr zu wünschen übrig liess.

最初スウィスの選手が、その宿舍についた時には、何でも一つの屋根裏の小さい部屋に三人一緒に入れやうとして居たらしい、それで連中が大いに不平をもらした譯である。

譯すまでもないが、樣するに「―それから宿舍は、惡かあなかつたが、待遇にはまことに悲觀させられた」位の事である。

（君一生）



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

スキー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

小樽市稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

サンドストラム會社

日本總代理店

瑞典サンドストラム會社製

スキーが新輸着致しました

同社製品は最くも

秩父宮殿下

の御下命の榮を賜はりたる逸品にして又世界的山岳家として我國の權威たる

槇有恒氏

の御賞讃品にして又御愛用品でございます。

美津濃特製スキー……九圓ヨリ十七圓マデ

東洋最大　専門大商店

美津濃

工場大阪浦江町｜｜卸部大阪淀屋橋｜

本店　大阪淀屋橋
大阪南支店　日本橋四
東京支店　神田小川町
神戸支店　三宮路切南

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いたします

◆雪の善惡、山の高低にかゝはらず諸方面から御寄稿下されんことをお願します。原稿紙御申越次第お送り致します

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること

◆記事中の數量は全て、C.G.S.係によられん事を望みます

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十三年六月三十日印刷
大正十三年七月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　伊藤秀五郎
印刷兼發行者　佐々木政吉
札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社
札幌市北六條西六丁目
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 38. Julio 1924. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十三年六月三十日印刷納本
大正十三年七月一日發行

山とスキー 第三十九號

定價金參拾錢

MIMATSU WOUINTER SPORTS UTIT

Patent Folding Camp Furnitures,
Folding Canvas Boats,
All Lines of Summer Sports Outfit.

美滿津の登山用具

MIMATSU & Co. TOKYO JAPAN TRADE MARK

MIMATSU & Co.

東京本郷赤門前・電話小石川一二〇七・五四八四